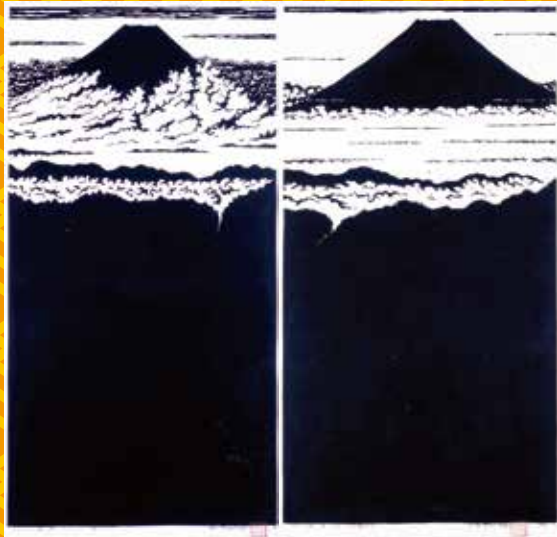




霊峰・阿

霊峰・峠

日本板画院展での最高位「棟方志功賞」の受賞作品



野田のくらしの雰囲気を残そうと、街の人から聞きとった言葉も木版画に

で話しながら、「野田には、街の人が生活する中から出てくる美しさ、そういうものがたくさん残っていたんです。だからスケッチしながら風景にとどまらず、通りがかりの方に聞いた言葉もそのまま

彫りました」と話します。

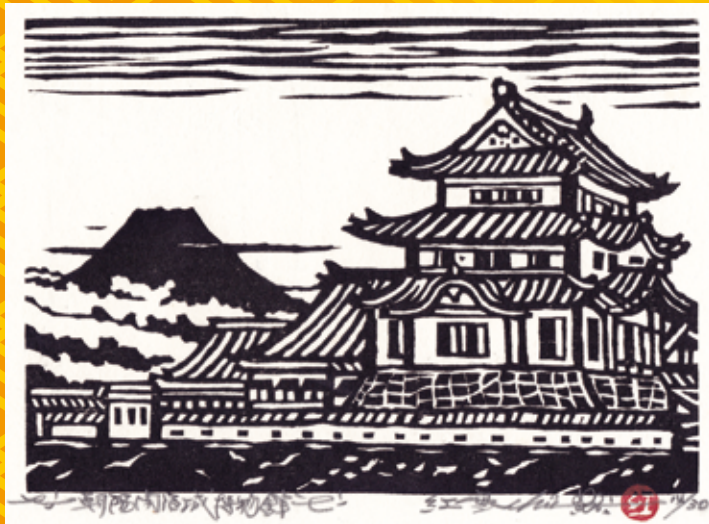
次世代に残したいもの

現在は、野田市関宿商工会発行の広報誌「ホロン」で連載されているそうで、「長年スケッチしてありますが、まだやり残している野田の景色がたくさんあります。なんとか完成させたいと頑張っていますが、木が伐採されたり、取り壊されたり景色が変わってしまうこともあってさびしい気持ちもありますね」と残念がります。

「街の風景が変わっていくこと



市民会館(国登録有形文化財・国登録記念物)の表門とベンガラ塀



富士山を背景に県立関宿城博物館

「3回シリーズで、来年の2月15日から5月6日にも関宿城博物館で、企画展を開催します。未発表作品も展示するので、お時間のある方はいらっしゃってくださいね」と前向きで気さくな口調で話していただきました。

感謝の気持ちで木版画を

は仕方ないことですが、自分は古き良き日本の原風景が好きなので、変わらないうでいて欲しいと願う気持ちが大いいですね」と話します。

「これまで直接薫陶を受けた棟方志功先生、末華先生、陶芸家の河井寛次郎先生、染色工芸家の芹沢銈介先生などのたくさんのお出会いから、今の自分があると思います。これからも木版画制作で、社会に恩返しをしていきたい」と話す一方、「生まれ育った日本の

風土の美しさを次世代に残していきたいという気持ちもあり、肉体は年々衰えてますが、創作意欲はどんどん高まっていますよ」と笑います。

野田・関宿シリーズを早く完成させたいと週末にはスケッチに励む一方で、全国各地での作品発表に加えて、今年の2月から5月までは、県立関宿城博物館で企画展を開催していました。

